

# 海洋ごみ問題と私たちにできること



「ご(5)、み(3)、ゼロ(0)」の語呂合わせで、毎年5月30日は「ごみゼロの日」です。「530(ごみゼロ)運動」は、1970年代に愛知県豊橋市の山岳会会長・夏目久男さんの呼びかけで始まり、その後、全国に広まりました。また、5月30日(ごみゼロの日)から6月8日(世界海洋デー)までの期間は「海ごみゼロウィーク」とされています。今回は海洋ごみ問題に着目して、問題の現状と私たちにできることを考えます。

## 増え続けている海洋ごみ

今、世界中で海洋ごみが増え続けています。その量は、プラスチックごみだけでも、世界で合計1億5000万トン以上の量が存在していると言われていています。さらに、毎年約800万トン(ジャンボジェット機にして5万機相当)に及ぶ量が新たに流れ出ていると推定されています。海洋ごみは増加の一途をたどっており、このペースで進めば、2050年には魚よりプラスチックごみの量が多い海になることが予測されています。この問題は、私たち大石田町民にとっても無関係の話ではありません。

今回は海洋ごみ問題に着目して、私たちにできることを考えていきます。



▲海岸に漂着した大量の海洋ごみ。プラスチック製の容器やビニール袋などが目立ちます。

## 海洋ごみの7〜8割は街から流れてくる

海洋ごみはいったいどこから来るかご存じでしょうか。その大半は私たちが暮らす街から来るもので、街で捨てられたごみが水路や川に流れ出し、やがて海へとたどり着きます。ある調査結果によると、海洋ごみの7〜8割は街から流れてきたものということが分かっています。

## 海の生き物への影響

「マイクロプラスチック」と呼ばれる直径5ミリメートル以下の微小なプラスチック粒子は、海洋環境に甚大な悪影響を与えています。マイクロプラスチックは、洗顔料や化粧品に使用される「スクラブ剤」に使用される小さなプラスチック、また、海を漂うプラスチックごみが、波や紫外線の影響で細かく砕かれることなどで生み出されます。

海の生き物が海水と一緒に飲み込んでしまったり、エサと間違えて食べてしまったりすると、プラスチックは消化できないため、体内に残り続けます。すると、こうした生き物をエサにしている鳥や

大型の魚などにも、マイクロプラスチックが蓄積していくことになります。マイクロプラスチックが消化器官に蓄積すると、臓器を傷つけたり、栄養を吸収する働きが弱くなったりしてしまうと考えられています。



▲海で採取されたマイクロプラスチック。直径5ミリメートル以下の非常に細かい破片が多いです。

## 私たちにへの影響

魚などの海洋生物を食べる私たちにも影響があります。

マイクロプラスチックが人体に及ぼす影響は研究段階のため、まだ解明されていませんが、プラスチックに含まれる有害物質によって、発がんリスクの増加や不妊、発育の問題、ホルモンの乱れとの関連が指摘されています。

## 組織の取り組み

町地区衛生組織連合会では、身近な環境の美化を目的に「クリーンアップおおいしだ(河川清掃)」を実施しています。河川清掃が行われる4〜5月は、これまで目につかなかった「ポイ捨てや不法投棄されたごみ」が、雪解けにより河川敷や道路などいたるところに散見されるようになります。そのため、毎年、ペットボトルや空き缶、粗大ごみなど、たくさんの方のごみが地域住民の皆さんの協力により回収されています。これらのごみが回収されないまま出水期(6〜10月)を迎えると、増水などによって河川の水位が上昇した際に、ごみも一緒に海まで流されてしまいます。

町地区衛生組織連合会と町内各小学校では、持続可能な循環型社会の形成を目指して「資源回収」を実施しています。令和4年度のそれぞれの回収実績は下表のとおりで、資源回収の取り組みは、使い終わった資源の再資源化につながるほか、再資源化によって、ごみの減量にもつながります。

## 私たちにできること

これまでのことを通して、河川や海、ひいては自分や家族を守るために、私たちにできることは何でしょうか。答えは身近なところにあります。一つは、河川清掃に参加してごみを拾い、下流へのごみの流出を防ぐことです。河川ごみの時点でごみを回収することで、マイクロプラスチック発生のリスクを抑えることができます。



▲河川清掃の様子。地域住民の皆さんのご協力により、毎年たくさんのごみが回収されています。



▲資源回収の様子。回収された資源ごみはリサイクルされます。

### ◆町地区衛生組織連合会資源回収実績(R4)

種別	回収量
紙類	4.4トン
廃タイヤ	139本
廃消火器	20本
小型家電	451kg

### ◆小学校集団資源回収実績(R4)

種別	回収量
新聞紙	42.8トン
雑誌	18.1トン
段ボール	16.8トン
ビール瓶	1,157本
牛乳パック	48kg
アルミ缶	210kg

二つ目は、資源回収を利用して資源の再資源化とごみの減量を推進することです。資源回収は、町地区衛生組織連合会と町内各小学校以外にも、一部のスーパーマーケットで店頭回収を実施しています。ほかにも、マイボトルやマイバッグを利用するなど、個人レベルでできる取り組みは多いです。ごみ問題はすぐに解決できる問題ではありません。しかし、私たち一人一人ができることに取り組むことで河川や海、私たちの未来を変えることができるかもしれません。